

社会学におけるマンガ研究の体系化に向けて¹⁾

——データベースによる先行研究の整理・検討から——

池 上 賢

1. 目的

本稿は、社会学領域におけるマンガに関する論考・研究（以下、マンガ論と包括して呼称する）を通時的に検討することにより、当該領域における先行研究の基本的情報の収集・整理と、今後の研究にむけた視座の提示を目的とする。近年、マンガに対する社会的な関心が高まる中で、社会学においてもマンガ研究が進みつつある。一方で、社会学におけるマンガ研究は十分に整理・検討されていない。たとえば、2001年に出版された『マンガの社会学』（宮原ほか編 2001）では、掲載されている複数の論文においてマンガを分析するために必要な論点が検討されている。しかし、本書には社会学におけるマンガ研究をマッピングした論文は含まれていない。しかし、学術論文を取り扱う複数のデータベースを参照すると、マンガに関する社会学的研究が、多いとは言えないながらも一定数存在する。つまり、これまでのマンガ研究において、先行研究は十分に検討されてこなかった。

マンガ研究は、社会学領域において今後も重要な分野となっていくことは間違いない。それを踏まえると、先行研究における試みを整理・析出・再確認することは重要な意味を持つ。

2. 方法

以下では、筆者作成の社会学領域におけるマンガ論のリスト（文末 表1）を参照しながら、それ

ぞれの時代の、マンガに関する社会的・歴史的状況を踏まえて、当該領域の変遷について記述していく。

2.1 データベースへのアクセスとデータの析出

本稿では、社会学領域におけるマンガ論を収集するため、2つのデータベースを用いた。検索にあたっては、2010年までを対象とし、2011年5月4日から5月12日に作業を実施した。

まず、日本社会学会の提供する『社会学文献情報データベース²⁾』を用いた収集作業を2011年5月4日におこなった。ここでは、キーワード“マンガ”、“まんが”、“漫画”、“コミック”でそれぞれ検索した後、重複した文献・明らかにマンガとかわりがない文献3件を削除した。結果、136件の文献が抽出された。

次に、国立情報学研究所の提供する『Cinii³⁾』を用いた収集作業を2011年5月12日に実施した。本データベースでは、拡張子を用いた条件検索が可能だったため、上記のキーワードに加えて社会学に関する文献を抽出するためキーワード“社会”を用い、「(マンガ OR まんが OR 漫画 OR コミック) AND 社会」という検索式を用いて、126件の文献を抽出した。その上で、社会学に関連する文献のみを抽出するため、a.タイトルに“社会学”が含まれている、b.社会学者が執筆、c.社会学関係の雑誌に掲載 という基準を設け、関連文献を選択した。結果として、35件の文献が追加された。

以上の作業を行った上で、2つのデータベース

の検索結果から得られたリストを集約し、重複している文献を削除した。最後に、筆者自身が収集済みの論文、あるいは収集作業中に新たに抽出された論文等から、同一の基準で文献を選択し、59件の文献を追加した。最終的に1945年から、2010年までの間で221件の文献リストを作成した。本稿では、紙幅の都合も踏まえ、1990年代までに発表された文献148件⁴⁾について一覧表を示し、それをもとに、戦後の社会学領域におけるマンガ研究を概観する。

3 戦後マンガ研究の展開と視座

3.1 1945～50年代

以下では、各年代の特徴を概観していく。ただし、終戦直後の1940年代と1950年代は、文献数が少なかったため、1960年代と合わせて概観する。なお、本稿では、文献リストに掲載されている文献については、通常の引用と区別するため〔 〕を用いて引用・参照を表記する。また太文字により表記を強調している。

終戦直後から1950年代における、主要なマンガ媒体は、『サザエさん』などの4コママンガや政治1コマ漫画を掲載していた新聞、および幼児から小学生を対象にしていた『少年』（光文社）・『りぼん』（集英社）などの月刊誌である。この時代において、マンガは文化的、社会的な価値はほとんど認められておらず、むしろ子どもにとって害悪な物とみなされていた。『出版年鑑 1955年版』では、少年少女誌は「読物よりも漫画、絵物語といったように視覚的な編集が特に目立ってきている」が、「本誌付録共に卑俗な漫画が意外と多く、識者間の批判が向けられだしている」と指摘されている（出版ニュース社編 1955：1639）。また、この時期のマンガ評論は、「啓蒙主義的マンガ論」や「人生の味わい論」、教育との関連では「マンガおやつ論」であり、マンガは「第一義的な存在ではなく、啓蒙あってこそ価値のあるものだとする考え」（呉 [1986] 1997：19）で

あった。この時期の社会学をみると、鶴見俊輔によるマンガを通じた社会批評が見られる〔鶴見 [1957] 1991；[1958] 1991〕ほか、『教育社会学研究』に高野圭一による検討が掲載されている〔高野 [1957] 1972〕。

3.2 1960年代

次に、1960年代を概観してみる。この時期の日本は、高度経済成長期にあたり、出版業界では雑誌の週刊誌化が加速しマンガにも波及し、マンガ週刊誌が発達した。これらの雑誌は、当時読者層の年齢を上昇させつつあった少年マンガ、少女マンガの媒体として大きな役割を果たした。具体的には、少年誌で『週刊少年マガジン』と『週刊少年サンデー』が競合する関係にあった。特に、1966年の末には、『週刊少年マガジン』は100万部を超える部数を記録している（呉 [1986] 1997：151；中野晴行 2004:22）。大学生たちが週刊少年マンガ誌を購読するようになったことが指摘されるのもこの時期である（呉 [1986] 1997：152）。さらに、青年誌、少女向けの雑誌、あるいは『月刊漫画ガロ』などマニア向けの専門誌も登場した（呉 [1986] 1997：168；ヤマダ 2006：408；竹内 1995：104-120）。また、劇画などの新しい表現も登場した。

ここまで1960年代におけるマンガの発展を確認した。端的に言えば、この時期はマンガが少年、少女から、対象とする年齢層を拡大させていった時期である。しかし、1960年代のマンガの量的、質的發展と対象とする年齢層の上昇は、当時数多くいたであろうマンガを子どものものとして見なす人々にとって混乱や懸念を抱く要因になっていた。具体例としては、『ハレンチ学園』（永井豪）に対する批判などがあげられる（竹内 1995：98-103）。

この時期も、社会学領域におけるマンガ論は研究というよりは、社会学者による批評という側面が強い。鶴見は「ガロの世界」〔鶴見 [1966] 1991〕において、直接的なイデオロギーを盛り込

んだ、白土三平や水木しげるの登場について言及している。また、副田義也がマンガ論を発表し始めるのもこの時期である。副田のマンガに関する活動は、大きく分けて、社会批評的なものと教育論的なものに分類できる。たとえば、副田は総合雑誌『新日本』において『少年マンガ時評』〔副田 1966-1967〕を連載している。ここでは、「マンガの氾濫が、大きな社会現象としてクローズアップされている」ことを踏まえて「おとなまで読まれている。少年まんがを時評しながら、現象の背後にある 現代の隠された側面を引き出すことが示されている」〔副田 1966a : 66〕。副田は『経済往来』でもコラム『少年マンガの美学』〔副田 1969-1970〕を連載していた。一方、教育的な視点からもマンガを論じ初めている〔副田 1966d・1966e〕。ここでは、赤塚不二雄の『おそ松くん』の特徴を取り上げ、「少年たちが、その心理と行動において成長してゆくときに、その成長をたすける」〔副田 1966e : 44〕としている。この他、社会心理学的な内容分析の試みとして山下恒男による研究「漫画と子どもの笑い——子ども漫画における笑いの後退と新しい動き」〔山下 1968〕が雑誌『児童心理』において発表された。

ここまで、1950年代と60年代の社会学的マンガ論について確認した。内容についてみると、社会批評的なものと教育論的なものが主流となっており、関連して教育関係の雑誌に掲載される傾向が見られた。呉智英は1960年代からまとまったマンガ評論、マンガ研究が発表され始めると指摘（呉 [1986] 1997 : 21）した上で、鶴見俊輔、多田道太郎、尾崎秀樹、佐藤忠男らの論者を挙げる。そして、共通点として「大衆の精神構造の反映物としてマンガを見、また、マンガの中に大衆の精神構造を発見していこう、とする姿勢」（呉 [1986] 1997 : 21）を指摘する。米沢嘉博は、戦後のマンガ評論では昭和30年代（1955～）に児童文学者や教育関係者により、マンガと読者である子どもたちとの関係が扱われていた（米沢 1997:42）としている。以上を踏まえると、1960

年代までの社会学的マンガ論はマンガ評論全体と共通した要素を持っており、それに包括されている。社会学的マンガ論は、社会学としての独自の視点を確立させていなかったといえる。

3.4 1970年代

次に1970年代を見ていく。この時期は、少年マンガ、少女マンガ、青年マンガなどは継続して発展していく。その一方で、風刺を主目的とする大人マンガは専門誌が休刊になるなど衰退し、新聞や（マンガ専門誌ではない）雑誌に掲載されるようになる。少年向けマンガに目を向けるとこの時期の少年誌『週刊少年サンデー』や『週刊少年マガジン』読者の高年齢化は、1960年代から続き、やや高学年の読者を対象とする傾向があった。そのため、1977年には小学生向けのマンガ雑誌として、『コロコロコミック』（小学館）が創刊しゲームやアニメの流行とタイアップし、子どもの娯楽を先導する役割を果たした（竹内 2006b : 397）。1968年に創刊されていた『週刊少年ジャンプ』も青年向けのマンガの比重が高かった他紙に対抗して、低学年向けのマンガを重視していた。

青年誌に視点を向けるとこの時期は、「青年誌を中心とした、劇画、漫画には、愛や憎悪、性と暴力、倦怠、虚無など青年期特有の心理が描き込まれ」ており、「劇画は時代の感情をダイレクトに表現する装置として機能していた」（竹内 2006b : 395）。また、副田によるとこの時期のマンガの特徴として「人気作品の主人公として、市民道徳を守る、やさしい人間がしばしば描かれる」「小市民もの」という作品が登場した〔副田 1983a : 83〕。この点を踏まえると、1970年代は、1980年代以降にサラリーマンを主人公にした作品などが登場する下地として、青年マンガというジャンルが完成した時期として見る事が出来る。

このような青年マンガの傾向に影響を与えたと考えられるのが、1970年代の少女マンガである。少女マンガでは60年代末から、70年代にかけて、萩尾望都、竹宮恵子、山岸涼子、大島弓子、など

の昭和24年(1949年)前後に生まれた団塊世代のマンガ家の活躍が目立つようになる。いわゆる24年組と呼ばれる作家たちである。竹内は24年組による作品がかつての文学と同様に「大衆娯楽的な読み物から、個人の思想信条を主と」して変化していったとする(竹内2006b:394)。

このように、1970年代のマンガは流通媒体としての雑誌、および作品内容の両面において引き続き発展を見せていた。また、この時期にマンガ雑誌に掲載された作品を同じ出版社が単行本として発売するという形式が完成した。竹熊によれば、「雑誌・単行本の両輪で利益をあげるシステム」の成立は1973年頃である(竹熊2004:49)。

この時期のマンガは社会的にどのような位置づけを与えられているのだろうか。呉は1974年から1978年について、「マンガは文化的市民権を認められ、出版産業の重要な一角を占めるように」なり、「読者は拡大し、マンガ誌は種類・発行部数ともに増大した」と指摘する(呉[1986]1997:178)。また、夏目房之介によれば、70年代以降のマンガは「低位文化としての大衆文化でありながら、高位文化に浸透する領域の広さをジャンルとして獲得していった」(夏目2006:124)。このように1970年代は、マンガの多様化がさらに進む中で、後に文化として認められていく過程が始まった時代である。この時期の社会学的マンガ論についてみると、引き続き、鶴見、副田による社会批評的、教育的論考が数多く発表される一方、統計的手法を用いた研究などが増加している。

まず、鶴見は引き続き、「鳥羽僧正と『鳥獣戯画』」、「漫画の面白い社会」など多くの論考を発表している[鶴見[1971a]1991:[1971b]1991;鶴見[1973]1991:[1976]1991]。副田も継続して、『経済往来』誌に「少年マンガの美学」[1969-1970]、「現代マンガ作家論」[1971-1972]を連載している。また、「子どもとマンガ」、「マンガの読ませ方」など教育学的な視点からも意見を発信するようになった[副田1970b;1970c;

1972]。副田は、少年マンガが偏見の対象になっていることを踏まえて「存在が証明されない影響が規定され、少年マンガにスケープ・ゴートの役割が押しつけられている」[副田1972a:52]と、当時の批判に反論を試みている。このように、この時期は副田、鶴見の思弁的な論考が行われた。

一方、1970年代はデータに基づいた研究や社会学の研究手法を用いて本格的にマンガを研究しようという検討も行われ始めており、副田も「マンガ文化」[副田1973b]を『講座現代ジャーナリズム』に寄稿している。副田はの中で、マンガにかかわる議論の焦点として、教育的効果、思想的価値、大衆文化・芸術としての性格を挙げている[副田1973b:217]。また、川浦康至は「マス・メディアとしてのマンガの表現構造」[川浦1977]において人気作品のリストを作成し、85作品を分析した[川浦1977:172]。ここでは、コマ数、コマ出現率、動きコマ出現率、視点出現率、背景出現率、などの視覚的特性、吹き出し数、破裂型吹き出し出現率、セリフ字数、ひらがな出現率、などの言語的特性を抽出し、その経年変化、作品の因子分析などを行った。結果、主題(ギャグ・ナンセンス/ストーリー)に関する因子、描画法に関する因子、動きに関する因子が抽出された。川浦はこの結果に基づき、マンガの分類として動的なギャグ・ナンセンスマンガ/動的なストーリーマンガ/静的なストーリーマンガ/静的なギャグ・ナンセンスマンガを提示した[川浦1977:181]。この他、こどものスポーツマンガの読解について統計的な調査を行った「スポーツマンガのこどもに与える影響について」[村上繁・今村義正・大堀孝雄1971]、小学生332名(男子174名、女子158名)および大学生57名(男子29名、女子28名)にアンケート調査を行い男女の違いや大学生の予想以上の接触率を明らかにした磯貝芳郎、福富護による「子どものマンガ読みの傾向」[磯貝・福富1977]なども先駆的なマンガ研究として重要である。

1970年代の社会学的マンガ論は次のように特徴

づけられる。内容についてみると、継続して社会批評的、教育論的論考が多いが、思弁的なものだけでなく、データを用いた調査研究もおこなわれるようになった。媒体についてみると、教育関係の雑誌が継続して多いが、『講座現代ジャーナリズム』や『年報社会心理学』など、学術書や学会誌への掲載が見られるようになる。

呉智英は、1970年代のマンガ評論について1960年代後半以降、啓蒙主義的なマンガ論とも、大衆文化論的なマンガ論ともちがった「思い入れ過剰なマンガ論」（呉 [1986] 1997: 23）が登場したと指摘する。これらの評論の特徴は、大衆文化論的な側面からの分析に加えて「マンガ家の創作の精神構造にまで入り込んでマンガ評論をする方法論」であった（呉 [1986] 1997: 24）。しかし、このような傾向は、統計などを使用するようになったこの時期の研究にはみられない。したがって、1970年代はマンガ研究において、社会学独自の視点や方法論の萌芽がみられた時期と考えると良いといえる。

3.5 1980年代

1980年代はマンガの多様化の時代である。たとえば、少年マンガではラブコメやいわゆるツッパリ、ヤンキーを取り扱う作品が登場した（米沢 2006b: 400）。また、社会現象として『週刊少年ジャンプ』が流行した。1987年に行われた毎日新聞の読書世論調査では〈好きな週刊誌〉において『週刊少年ジャンプ』が全体で1位になっている（毎日新聞東京本社広告局 1988: 28）。青年誌、成年誌に目を向けると、1960年代後半に創刊された青年誌は80年代に入ると、「定番の長期連載を中心に読者と共に年を重ねるようになり、読者の年齢層が次第に高くなる傾向」（米沢 2006b: 401）が出てくる。そのため、各出版社は取り残された青年層を対象とした雑誌としていわゆる“ヤング誌”を創刊した。『ヤングジャンプ』（集英社）、『ヤングマガジン』『ビッグコミックスピリッツ』『COMIC モーニング』（講談社）、など

があげられる。

成人向けの新たなマンガとして、『マンガ日本経済入門』（石森章太郎）に代表される実用的な情報マンガが登場したのもこの時代である（呉 [1986] 1997: 208）。女性向けのマンガに目を向けると、少女マンガが発展を続ける一方で、成人女性向けのマンガであるレディス・コミックが登場した（ヤマダトモコ 2006: 410）。

マニア向けのマンガ雑誌に目を向けると、この時期は上述のような性別、年齢を基準としたマンガ雑誌の分類にくわえて、かつての『ガロ』や『COM』のようなマンガマニアを対象とした雑誌『アフターヌーン』（講談社）、ホラーマンガを専門とする『ハロウィン』（朝日ソノラマ）などが創刊されている。よりコアなマニア向けの市場としては、1975年にスタートした同人誌の即売会『コミックマーケット』が80年代に拡大していった。特に、『やおい』とよばれる少年愛ものは、少女漫画に作家を供給すると同時に、90年代に『b-BOY』（ビブロス）を中心に『ボーイズラブ』という女性向けジャンルが生み出される嚆矢となった（米沢 2006b: 404）。呉は、1986年以降を戦後マンガ史の第6期として捉え、「マンガが現代文化の1ジャンルとして市民権をまがりなりにも認められた時期」としている（呉 [1986] 1997: 207）。

この時期の社会学的マンガ論はどのようなものであったのだろうか。鶴見は引き続き、「漫画の読者として」などの評論を発表している〔鶴見 [1980] 1991; 1989〕また、副田も引き続き、論考を発表している。ここでは、作品だけでなく、「マンガはなぜ人びとの心をとらえたのか」や「青年文化としてのマンガ文化」「現代マンガ・描写の成立過程：原作者小論」など、特定のジャンルや雑誌の通時的傾向の変化などについても取り扱うようになる〔副田 1981a; 1982a; 1985〕。

1980年代は70年代後半から始まったマンガを社会学的研究の対象にしようという動きが活発に

なる時期でもある。そのため、鶴見や副田に加えて、多くの社会学者がマンガについての論考を発表し、分析の可能性を検討している。たとえば、上記に関連して副田は著書『マンガ文化』[副田 1983a]を発表している。ここでは、メディアとしてのマンガの特性について「享受主体(受け手)」の側から検討し、マンガの特徴を(1)個人主義、(2)自由=日常性、(3)主体性・能動性にあるとしている[副田 1983a: 39]。安川一は「パーソナルなメディア空間：音楽 マンガ 若者文化」[1987]においてマンガの特徴として「現実を読み解くための『マニュアル』的性格」[安川 1987: 274]を指摘している。中野収も「媒体としての漫画」[中野 1980]において「現象としての漫画を外側から観察し、説明」[中野 1980: 106]しようと試みたほか、「華やかなマンガ作家たち」[中野 1985]において、マンガを「時代の気分、雰囲気、完成、美意識——広義の時代意識を映し出すメディア」[中野 1985: 107]として捉えている。ここでは、「ある時代のある特定の年代層が、あるマンガを圧倒的に歓迎するのは、そこに形象化されている『ひと』『もの』『こと』が、彼らの共有する時代意識のありようと共鳴している」[中野 1985: 107]とされる。磯貝芳郎も「マンガの社会心理学」[磯貝 1980]において「さまざまな調査技法を利用してマンガそのもの、およびマンガ読者、そして両者のかかわり合いを直接の対象とした実証的な社会心理学」の可能性を指摘し、先述した川浦[1979]の内容分析や、同じく川浦氏の未発表(当時)の調査結果や都生活局の調査結果を紹介している[磯貝 1980: 28]。また、石田佐恵子は「少女マンガにおける『文体』の意味」[石田 1988]において、方法論的個人主義(マンガを論じることで読者の主観的意味世界を論じる)、方法論的集合主義(時代背景や傾向を考察)とは異なる、マンガを社会学的分析対象とする方法として「認識の社会学」(方法論的相互作用主義)[石田 1988: 29]を主張した。ここでは、作者ごとの、絵柄、コマ割り、セリフ

配置などを「文体と呼称」し分析することが指摘されている[石田 1988: 29]。

この時期以降のマンガ研究者として多くの業績を残しているのが、現在まで継続的に研究を進めている茨木正治である。茨木は「政治漫画の機能——研究動向を主として」[茨木 1988]において「近年とみに顕在化した政治漫画の研究を紹介し、諸機能を検討していく」[茨木 1988: 80]として、先行研究の整理を行っている。

このような中、実際にテキスト内容などを分析する研究も現れる。たとえば、山本哲士は「漫画 ドナルドダックの文化帝国主義——ラテン・アメリカのコミュニケーション装置研究のため」において「ミッキーマウスとドナルドダックの創生」について「マス・イメージとしてのファンタジーとアドベンチャーの『ユートピア世界』を普遍化し世界にまきちらすものになった」[山本 1985: 310]とした。杉本厚夫は「スポーツマンガの記号論」[杉本 1987]で「漫画の中に表現されたスポーツが、どの様なフレームを持って、現実のスポーツを転形しているのか」[杉本 1987: 117]を多変量解析によって分析し、結果として、「『有り得るけれども有り得ない』という一種のパラドクスが、現代のスポーツマンガを支配している」[杉本 1987: 131]と結論づけている。

このように、1980年代は1970年代から引き続き、社会学的マンガ論が活発になっていく発展期である。この時期にもっとも盛んになされたのが、マンガを社会学の対象とするための検討(副田、中野、安川、磯貝、茨木など)である。また、わずかではあるが、実際に特定の作品やジャンルを研究する記事も現れるようになった。さらに、掲載媒体について表を確認すると、依然として教育雑誌・関係書籍が多いが、学会誌[茨木 1988; 杉本 1987]、大学紀要[茨木 1989]、学術書[山本 1983; 安川 1987]などにおける発表も増加し、多様化していることが分かる。このように1980年代は、マンガが子供だけでなく大人も読むものとして、文化として認知されていく中で、教育的

な視点以外の論考も登場したのである。

3.6 1990年代

1980年代後半から1990年代にかけては従来のような年齢、性別によって分類された雑誌（少年誌、少女誌、青年誌、レディス・コミック）などではなく、より細かく分類されたジャンルの専門誌（時代劇マンガ専門誌、パチンコマンガ専門誌など）が登場するようになった（米沢 2006b：404）。また、1990年代はアニメ化などの、メディアミックス戦略が増加していった時期である（米沢 2006b：405）。このようにマンガが文化的な価値を認められていく一方で、マンガ市場は停滞した。1996年の『出版指標年報』では、「成長神話に限界！ コミックス市場ついに前年割れ」とマンガ市場の停滞が紹介されている（社団法人全国出版協会 1996：245）。なお、コミック市場についてその後の動向を見ると、特にマンガ雑誌の衰退が著しいことが指摘されている（中野晴行 2004：210）。

「有害マンガ論争」も起こった。竹内によれば、東京都生活文化局が行った調査や、マスコミにおける性的描写が含まれたマンガ作品への批判的記事がきっかけとなり（竹内 1995：181-190）、各地でマンガ作品が「有害図書」として指定されるという事態になった。

80年代はマンガの社会現象化を受け、研究も急激に増加（80年代24件→90年代43件）している。一方で、長期にわたり研究を発表し続けてきた鶴見や副田の活動は縮小した。副田の論考としては、「現代日本のマンガ文化」〔副田 1990〕や「マンガ総合図書館の提言」〔副田 1994〕、鶴見の論考としては、「昭和マンガのヒーローたち」〔鶴見 1991〕がある。

この時期は、マンガを社会学の研究対象とするための検討が多様な論者によってなされるようになった。たとえば、渡辺潤は「メディアとしてのマンガ」〔渡辺 1990〕において、「現実味の乏しい世界」に生きている我々にとって漫画が「現実

らしきものの感触を確かめるため」に駆使されるメディアの一つとして不可欠であると指摘する〔渡辺 1990：10〕。また、片桐新自は「マンガの社会学——マンガを通してみる大衆意識の分析」〔片桐 1990〕において、マンガ史を検討することで日本社会の姿を捉えることを目指し、「マンガに大衆が求めているものは、『笑い』、『性』、『力』の三要素」〔片桐 1990：48-49〕であると指摘している。

安川も1980年代の考察を引き継ぎ、「マンガの情景——ビジュアルの循環」〔安川 1993〕や「マンガの語られ方——“ヴィジュアル”をめぐる困惑」〔安川 1994〕などを発表している。ここでは、マンガが「日常世界の理解の枠組み日常感性の方法論のプロトタイプを供給することになる」〔安川 1993：298〕ことや「マンガ語りは“ヴィジュアルなもの”、さらには、メディア表現の様式を論じるための、より論理的な方法論を結晶させることに結びついていかななくてはならない」〔安川 1994：108〕ことが主張された。

次に注目したいのは、1990年代初頭に起こった有害コミック規制問題に関連した研究である。ここでは、マンガのテキストに含まれる女性蔑視的表現についての分析や、構築主義的な記述、読者に対する調査などが数多く発表された。たとえば、豊田秀樹・福富護・西田智男らによる「マスメディアにおける女性表現の単次元性——雑誌メディアにおけるマンガとグラビアの分析」〔豊田ほか 1993〕では、内容分析の結果として、「雑誌メディアの中で女性の性が性的欲求の対象として扱われている傾向」〔豊田ほか 1993：5〕が批判されている。また、石川弘義の「青少年とマンガ・コミックスに関する調査」〔石川 1993〕では「青少年とマンガ・コミックスに関する調査」（東京、長野、岡山で割当法により、中学生、高校生1800人を対象とする）のデータを分析し、マンガが多くの場合「健康に受けとめているという事実」や「子どもたちの主体性」が確認されている〔石川 1993：126〕。

構築主義による研究も見られる。中河伸俊の『『脅かされる』こどもたち——『有害』コミック問題の構築』[中河 1993]では、『『有害』コミック問題は、過去から繰り返されてきた環境浄化運動や悪書追放の歴史』の最新の1コマに過ぎないと指摘されている[中河 1993: 77]。中河は他にも、『『有害マンガ』と社会問題のレトリック——道徳的ディスコースの事例研究』[中川 1995]において、有害マンガ問題における、喪失のレトリック、権利のレトリック、危険のレトリック、不合理のレトリック[中河 1995: 126]の存在を明らかにしている。また、永井良和の「情報化と青少年対策——〈有害コミック〉問題からのひろがり」[永井 1993]でも当該の問題について「〈おとな／子ども〉という区分の維持とそこにあるべき情報アクセスの秩序という、いたって政治的な題材」[永井 1993: 44]であることが指摘されている。矢島正見・山本功による『『有害コミック』規制運動の展開』[矢島・山本 1994]では、都条例改正問題について、規制を求める陳情書・請願書の分析、陳情書・請願書の代表者への面接調査を行っている。ここでは、陳情・請願の代表者は、必ずしも主体的にポルノコミック問題に関心があるわけではなく、運動の実態は、警察行政主導のもの[矢島・山本 1994: 85]であることが示された。

特定のジャンルなどについての論考も発表されている。まず、少女マンガについてみる。石田佐恵子は「〈少女マンガ〉の文体とその方言性」[石田 1992]において、「マンガ表現における『文体』とは、作者・読者間に共有されている種の美意識、身体・空間感覚、リアリティ感覚を映し出すものである」[石田 1992: 68]として、ヤング・レディス誌の作品群を分析する。結果として、ヤング・レディス誌作品では、身体や容姿をめぐる競争は回避されており、〈少女マンガ〉同様、〈夢〉の世界[石田 1992: 83]であることが指摘されている。少女マンガについては、『サブカルチャー神話解体——少女・音楽・マン

ガ・性の30年とコミュニケーションの現在』[宮台ほか編 1993]に収録された宮台真司の「少女メディアのコミュニケーション」[宮台 1993]でも分析されている。宮台は「ある時代以降、少女マンガが、〈世界〉を読み〈私〉を読むための、〈関係性のモデル〉として機能し始めた」[宮台 1993: 13]ことを前提に、「小学校低学年の頃から少女マンガを通じて〈世界〉の読み方を徹底して学習して」きた当時の女性は、「複雑な人間関係の中での期待外れについての『免疫力』を身につけている」[宮台 1993: 14]と指摘した。また、大塚英志は「少女マンガの消費社会史——『24年組』の発生と終焉」[1996]において、いわゆる24年組と呼ばれるマンガについて焦点化し、少女マンガは、女性たちの「自らの女性性にいかに輪郭を与えるかという、大衆レベルの願望に突き動かされた現象」[大塚 1996: 189]であると示した。

少女マンガ以外のジャンルでは、守如子による「女性向けポルノグラフィ——〈レディースコミック〉から浮かび上がるセクシュアリティ」[1999]などもある。ここでは、「女性向けポルノグラフィとは、女性読者に語りせ-共感することによって読者を女性として主体化する装置なのである」[守 1999: 124]ことが示されている。また、女性向けではないジャンル分析に注目すると、瓜生吉則が「〈劇画〉ジャンルの成立と変容」[瓜生 1996]において、劇画というジャンルについて、表現媒体に注目しつつ捉えなおしている。瓜生には、「メディアとしての〈梶原一騎〉——あるいは、“劇画の帝王”の語り方」[1997]などの著作もある。

重要な論考として、北田暁大による「マンガ読者空間の戦後史」[北田 1999]では、少年マンガと少女マンガが比較されている。それによると、少年マンガは斜め読みするだけ(画像をみるだけで)何らかの意味を受け取ることができる「気散じ(distractio)」[北田 1999: 121]のメディアであるのに対して、少女マンガの読者である少

女たちの読み手性は、私的出来事の外部を目指す物語性を展開しつつつぎとシーンが転換することに意義を見出している [北田 1999 : 124]。そのため、「70年代を通して少女〈マンガ〉を読む行為 = 読書空間は日記を書く行為さながらに徹底して『私/心的な事柄』として構成されていった」 [北田 1999 : 129]。その他、松田恵示、谷口陽子、島崎仁らによる「スポーツ漫画に見られる「表象」としてのスポーツとその構成に関する社会的研究——メディアとしての漫画が持つ特性とスポーツに付与される意味との関係から」 [松田ほか 1992 : 143] などもある。

次に、内容分析について見てみよう。政治漫画については、茨木が「選挙と政治漫画——研究動向・内容分析」 [茨木 1990a]、「政治漫画にみる選挙——第39回衆議院選挙」 [茨木 1990b]、「政治漫画にみる政治と社会——1992年6・7月を中心として」 [茨木 1993] などの豊富な成果を発表している。たとえば、「政治漫画に見る選挙」では、第39回衆議院選挙を題材とし、1) 争点の内容分析、2) シンボルの分析を行った。結果として、「政治漫画は『今、政治では何が問題となっているのか』が真っ先に求められるために、政治過程は他の争点を引き立てる『地』の役割を果たしている」 [茨木 1990b : 110] とした。茨木は、他にも「政治・メディア・政治漫画」 [茨木 1997-2000]、博士論文である『「政治漫画」の政治分析』 [茨木 1997] なども発表している。それ以外には、宇田川拓雄らによる「教科書、新聞、マンガにおける老人のビジュアルイメージ分析」 [宇田川ほか 1999] において、登場頻度や、主人公との関係性を分析されており、結論として、マンガに登場する老人イメージは比較的バランスが取れていると指摘されている [宇田川ほか 1999 : 49]。

この時期は、マンガ読者に対する分析も本格化する。たとえば、住田正樹・藤井美保の「少女少女漫画の受容過程分析——受け手の特性と反応」 [住田・藤井 1992] では、量的な調査が行われて

いる。ここでは、男子と女子の接触パターンに違い、年齢の上昇に伴う漫画の選択基準、漫画にたいする接触頻度が高い児童ほど漫画について友人と話題にすること、おなじく接触頻度が高い児童ほどよりアクティブな接触をしていることなどが示されている [住田・藤井 1992 : 102-104]。

質的な調査としては、谷本奈穂の「人気マンガの魅力の構造」 [谷本 1997] がある。ここでは、高校生を対象に好きなマンガに関する自由記述式のアンケート調査を行っている。結果として、『スラムダンク』の魅力は、「成長、笑い、友情」という要素であることが明らかにされ、マンガ世界の中におけるそれらの要素が当時の高校生が置かれている、弱さ、閉塞、孤独と照応関係にあり、魅力の構造になっていることが指摘された [谷本 1997 : 179]。また、谷本は上記の調査結果を別な角度から分析した「読者アンケートにみるマンガの性差」 [谷本 1998] も発表している。ここでは、好きなキャラクターの認知像やキャラクターの男女差などについて検討し、読者の性別に関係なく、従来のジェンダーロールを大きく逸脱したキャラクターは好まれず、伝統的性役割を果たすキャラクター像が好まれやすくなった [谷本 1998 : 165]⁵⁾。

マンガ自体や、あるいは言説の歴史に関する研究も現れた。瓜生吉則の「〈マンガ論〉の系譜学」 [瓜生 1998] では、社会学も含めたそれまでのマンガ論に対する言説の分析が行われている。また、中西茂行の「マンガ版ビルドゥングスロマンの形成とその変容」 [中西 1998] では、「広義の成長物語マンガ、狭義のマンガ版ビルドゥングスロマンの成立、変容する過程にどのような社会心理の歴史的変容(歴史心理)が汲み取れる」 [中西 1998 : 10] のか検討が行われている。

その他、山田政美による「漫画の中のアメリカ英語の社会言語学」 [山田 1994] や石上文正「社会・文化環境における変化・変換について」 [石上 1998]、ジャクリーヌ・ベルント「『アート』としてのマンガ」 [ベルント 1997] などの論考も

あった。

このように、1990年代は、社会学においてマンガを取り扱うための視座の検討や、実際にテキストの分析や社会調査を行った研究が見られるようになった。また、研究数についても、大きく増加し（80年代：25件→90年代：53件）、参与する研究者数も増加（80年代：11人→90年代：38人）した。

内容などについて具体的にみると、社会的な分析を行うための論考、有害コミック問題関連の論考・研究、特定のジャンルに関する論考（特に少女マンガが多い）、データを用いた内容分析・読者調査、と多岐にわたっている。また、媒体は学会誌、大学紀要、専門雑誌、学術書と80年代から継続して多様化した。

このように、マンガ研究は90年代において社会学において一定の位置づけを持つようになったといえる。なお、このような関心の高まりは社会学に限定されたものではなかった。そのため、2001年には学術研究を行う拠点として日本マンガ学会が設立された。社会学でも『マンガの社会学』（宮原ほか編 2001）が発表されるなど、その後のマンガ研究は量的に増加傾向にある。

4 暫定的な結論、今後の課題

初めに、戦後の社会的なマンガ研究の流れを簡単に整理してみる。

- 1950年代～60年代：マンガを媒体とした社会学者による社会批評・教育的論考が中心。内容分析などについては限定的で、あくまでも教育との関係におかれていた。
- 1970年代：統計や内容分析の手法を用いた研究の登場。社会学独自の視点の登場。
- 1980年代：マンガを教育的な論点にかぎらず、社会学の対象にしようという検討が本格化。データを用いた分析も継続して発表。発表媒体の多様化。

1990年代：マンガ研究の増加（25→53）。

社会的な分析を行うための論考、有害コミック問題関連の論考・研究、特定のジャンルに関する論考など内容の多様化の継続。発表媒体も継続して多様化。

2000年代：『マンガの社会学』発行。マンガ研究の定着（今後の検討課題）。

このように、戦後の社会学において、マンガは初期には社会学者による評論の対象として扱われていた。その後、社会学独自の視点から研究対象となり、その視座も多様化し、同時に社会学における地位も向上した。これらの研究には、どのような特徴があるのだろうか。

まず、1980年代以降、本格的に研究がおこなわれるようになっていく一方で、継続的な研究が十分になされていない。たとえば、副田は1990年代初頭以降、マンガ研究から離れている。また、中野、安田、谷本、瓜生など複数の論文を発表している研究者もマンガについての単著があるわけではなく、編著内の一論文などにとどまっている。

一方で、論者間には、議論の領域や視座において類似点が数多く存在する。たとえば、マンガが社会の中で人びとにとってどのような役割を果たしているのか、という点について、安川、宮台のマンガに対するスタンスには共通点が見られる。たとえば、安川はマンガの「現実を読み解くための『マニュアル』的性格」[安川 1987: 274]、宮台は少女マンガが「〈世界〉を読み〈私〉を読むための、〈関係性のモデル〉として機能し始めた」[宮台 1993: 13]ことを主張している。これらは、マンガというメディアが現実には不可能な代理体験を提供するメディアであるというよりは、現実社会を解釈するための枠組みを提供するという点を共に主張している。また、大塚は少女まんがの発達には、女性たちの「自らの女性性にいかに輪郭を与えるか」[大塚 1994: 189]という願望が関係していることを指摘し、守は、女性向けポルノグラフィを「読者を女性として主体化する装

置」[守 1999 : 124]であることを主張している。これらは、共に女性向けのマンガ作品が彼らの主体、あるいはアイデンティティの構成に関連している点に注目している。このような議論の共通点は、マンガの教育への応用や、マンガに描かれている社会像への注目など、さまざまな事項に見られる。

このように社会学領域におけるマンガ論は、単独の著者が継続して実証的な研究を蓄積することはなかった一方で、多数の論者が類似した議論を展開してきた。したがって、今後、複数の論者の議論を整理・体系化してマンガの位置づけについて包括的な議論を展開することで、社会学においてマンガを取り扱う上での共通の理解を構成できる可能性があるといえるだろう⁶⁾。

本研究では、戦後の社会学におけるマンガに関する研究を概観してきた。今回の先行研究のレビューは暫定的なものであり、今後さらなる資料収集や議論の整理が必要である。これを踏まえて、最後に今後の課題について触れることにしたい。第1に、文献収集方法、および収集基準の精緻化である。今回収集した文献では厳密には社会学者の物とは言えない文献も含まれている。たとえば、日本社会学会情報データベースで検索されたジャクリーヌ・ベルントの専門は美学である。今回は、データベースを中心とした抽出作業を行ったが、結果として、社会学という領域を同定すること自体の困難さが明らかになった。したがって、今後はより厳密な基準をもとにした先行研究の析出が行われるべきである^{7) 8)}。

また、人文社会科学全体における、他の分野の議論との関連性を明らかにすることも重要である。たとえば、本稿で取り上げた初期の研究についてみると、教育的な視点からマンガを取り上げたものが多かった。これらの議論は当然のことながら、教育学におけるマンガ研究にも包括され得るものである。逆に、他分野のマンガ研究にも社会学が参考とすべき研究は多い。マンガに関する研究は、学際的であり、社会学、文学、心理学、歴史学な

どさまざまな論者が参与している。したがって、今後は社会学だけでなく、人文社会科学全体におけるマンガ研究についても先行研究の整理・体系化が行われ、それらの成果との関連の中で、社会学におけるマンガ研究も位置付けを検討する必要がある。

本稿では社会学においてマンガは本格的には取り扱われてこなかったものの、一定の研究蓄積が存在することが明らかになった。我々を取り囲むメディア環境は、複雑化し、特定のメディアが主要な娯楽メディアとなる状況ではなくなった。しかし、マンガは娯楽として、あるいは情報媒体として一定の地位を占め続けている。したがって、現代社会における複雑なメディア環境を描きだすための分析対象としてのマンガは依然として重要な存在である。それに対する研究がさらに発達するためにも、先行研究の整理・検討・体系化は、社会学者が早急に取り組まなければならない課題と言える。

注

- 1) 本稿は2011年9月17日・18日に行われた第84回日本社会学会における報告『社会学におけるマンガ研究の視座と展開——先行研究の整理・検討から——』を加筆修正したものである。
- 2) http://dbr.nii.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000031SOCIO_2012.12.9
- 3) <http://ci.nii.ac.jp/2012.12.9>
- 4) 残りの73件が2000年代に発表された記事であり、当該の時期におけるマンガ研究の量的な増加が確認できる。
- 5) 付言すると、先述した北田や、石川の検討も読者論を行うための考察と捉えてよいといえる。
- 6) 筆者による具体的な検討としては、拙稿(池上2009)も参照されたい。
- 7) 取り組みの一つとして筆者は、2012年12月現在、家島明彦が代表者となっている研究プロジェクト「マンガに関する人文・社会科学研究の国際的・学際的データベースの構築」(科学研究費補助

金 挑戦的萌芽研究 23650123 代表：家島明彦 2011-2013) に参与している。ここでは、学術雑誌を対象とした目視による悉皆調査により、マンガ研究に関するデータベース構築を目指している。

- 8) 関連した研究成果として、上記プロジェクトの途中経過報告も行っている (池上ほか 2012)。
- 9) 文献リストにおいて灰色に染められている記事は、絶版などで筆者が原著にあたれなかったものである。
- 10) 使用データベースは、Cinii を Cinii、日本社会学会文献情報データベースを JSSDB、筆者追加による記事を SIA と表記している。また、抽出理由は Author が「筆者が社会学者」、JSSDB が「日本社会学会文献情報データベースで検索された」、Mag が「社会学関係の雑誌に掲載」、Title が「タイトルに社会学と含まれている」、Other が「その他」に該当する。

文献

- 呉智英, [1986] 1997, 『現代マンガの全体像』 双葉社.
- 池上賢, 2009, 「マンガ経験の社会学へ——社会学的マンガ研究の実践への試論」『サブカルポップマガジン まぐま』 文藝書房, 17: 98-109
- 池上賢・秦美香子・西原麻里・家島明彦・足立加勇, 2012, 「社会学におけるマンガに関する研究の概観と展望 (2) ——メディア研究領域」第 85 回日本社会学会一般研究報告.
- 毎日新聞社東京本社広告局, 1988, 『読書世論調査 1988 年版』.
- 宮原浩二郎・荻野昌弘編, 2001, 『マンガの社会学』 世界思想社: 4-33.
- 中野晴行, 2004, 『マンガ産業論』 筑摩書房.
- 夏目房之介, 2006, 『マンガに人生を学んで何が悪い?』 ランダムハウス講談社.
- 社団法人 全国出版協会, 1996, 『出版指標年報 1996 年版』.
- 出版ニュース社編, 1955, 『出版年鑑 1955 年版』 出版ニュース社.
- 竹熊健太郎, 2004, 『マンガ原稿料はなぜ安いのか?』

イースト・プレス.

竹内オサム, 1995, 『戦後マンガ 50 年史』 筑摩書房.

———, 2006b, 「第 3 章 表現の進化と多様化 (1970 年～1980 年)」竹内オサム・米沢嘉博・ヤマダトモコ編, 『現代漫画博物館——1945-2005』 小学館: 394-399.

ヤマダトモコ, 2006, 「少女・女性漫画史概論」竹内オサム・米沢嘉博・ヤマダトモコ編, 『現代漫画博物館——1945-2005』 小学館: 406-412.

米沢嘉博, 1997, 「マンガ読者論」大森千秋編『コミック学のみかた。』 朝日新聞社: 42-43.

———, 2006a, 「第 2 章 少年週刊誌と青年誌の誕生 (1959 年～1969 年)」竹内オサム・米沢嘉博・ヤマダトモコ編, 『現代漫画博物館——1945-2005』 小学館: 388-393.

———, 2006b, 「第 3 章 表現の進化と多様化 (1970 年～1980 年)」竹内オサム・米沢嘉博・ヤマダトモコ編, 『現代漫画博物館——1945-2005』 小学館: 394-399.

〈表 1 社会学領域マンガ論文献リスト〉⁹⁾¹⁰⁾

使用データベース	著者、編者名	発行年	論 題	掲載雑誌名・著書名	編 者	出版元	抽出理由
SIA	鶴見俊輔	1949	ウォー著「アメリカ漫画の歴史」	世界評論 4 (4)		世界評論社	Author
SIA	鶴見俊輔	1950	アメリカの漫画と生活	婦人公論：1 (再録：1991) 鶴見俊輔集 8 漫画の読者として			Author
SIA	高野桂一	1957	こどもと児童雑誌——児童読物の科学の確立のために	教育社会学研究：12		日本教育社会学会	Mag
SIA	鶴見俊輔	1957	漫画的精神について	東京新聞夕刊：6.24-25 (再録：1991) 鶴見俊輔集 8 漫画の読者として			Author
SIA	鶴見俊輔	1958	忍術漫画論	日本読書新聞：7.21 (再録：1991) 鶴見俊輔集 8 漫画の読者として			Author
JSSDB	副田義也	1966a	「シェー」について (少年マンガ時評・1)	新日本：10			JSSDB
JSSDB	副田義也	1966b	「影丸」よ、さらば (少年マンガ時評・2)	新日本：11			JSSDB
JSSDB	副田義也	1966c	「旋風」はどう吹きぬけたか (少年マンガ時評・3)	新日本：12			JSSDB
SIA	鶴見俊輔	1966	『ガロ』の世界	展望：1 (再録：1991) 鶴見俊輔集 8 漫画の読者として			Author
JSSDB	副田義也	1966d	少年マンガをみる視覚	青少年問題：13 (2)		青少年問題研究会	JSSDB
JSSDB	副田義也	1966e	少年マンガをみる視覚	青少年問題：13 (3)		青少年問題研究会	JSSDB
JSSDB	副田義也	1967a	変身譚 (少年マンガ時評・4)	新日本：1			JSSDB
JSSDB	副田義也	1967b	孤独な技能者の肖像 (少年マンガ時評・6)	新日本：4			JSSDB
JSSDB	副田義也	1967c	方法について (少年マンガ時評・7)	新日本：5			JSSDB
JSSDB	副田義也	1967d	歴史における個人の役割 (少年マンガ時評・8)	新日本：6			JSSDB
SIA	山下恒男	1968	漫画と子どもの笑い——子ども漫画における笑いの後退と新しい動き	児童心理：22 (5)		金子書房	Author
JSSDB	副田義也	1968a	技術人と組織人：横山光輝「伊賀の影丸」	魅惑の少年マンガ		川島書店	JSSDB
JSSDB	副田義也	1968b	貧困の美学：水木しげるの小論	魅惑の少年マンガ		川島書店	JSSDB
JSSDB	副田義也	1968c	女の子たち：少女マンガ論・断章	魅惑の少年マンガ		川島書店	JSSDB
JSSDB	副田義也	1968d	文明論：野々村中也『人間の世界』	魅惑の少年マンガ		川島書店	JSSDB
JSSDB	副田義也	1968e	魅惑の少年マンガ			川島書店	JSSDB
JSSDB	副田義也	1969a	連載・少年漫画の美学 反日常の世界：ジョージ・秋山「ほらふきドンドン」	経済往来：10			JSSDB

JSSDB	副田義也	1969b	連載・少年漫画の美学 現代の貧しい生：つげ義春「ねじ式」	経済往来：12			JSSDB
JSSDB	副田義也	1970a	少年マンガの魅力（“ひとりの少年マンガ愛好者の微視的感想”）	心情公論：1（3）		心情圏出版	JSSDB
JSSDB	副田義也	1970b	子どもとマンガ	児童心理：2		金子書房	JSSDB
JSSDB	副田義也	1970c	マンガの読ませ方	児童心理：7		金子書房	JSSDB
JSSDB	副田義也	1970d	仮面の思想：つげ義春「ゲンセンカン主人」（連載・少年マンガの美学III）	経済往来：1			JSSDB
JSSDB	副田義也	1970e	憎悪について：楳図かずお「おろち」（連載・少年マンガの美学IV）	経済往来：2			JSSDB
JSSDB	副田義也	1970f	風俗から真実へ：永井豪「ハレンチ学園」（連載・少年マンガの美学V）	経済往来：3			JSSDB
JSSDB	副田義也	1970g	非道徳の世界：赤塚不二夫「もーれつア太郎」（連載・少年マンガの美学VI）	経済往来：5			JSSDB
JSSDB	副田義也	1970h	非道徳の世界（続）：赤塚不二夫「もーれつア太郎」（連載・少年マンガの美学VII）	経済往来：7			JSSDB
JSSDB	副田義也	1970i	悪とはなにか：ジョージ・秋山「銭ゲバ」（連載・少年マンガの美学VIII）	経済往来：8			JSSDB
JSSDB	副田義也	1970j	宇宙感覚と生命感覚：手塚治虫「火の鳥」（連載・少年マンガの美学IX）	経済往来：9			JSSDB
JSSDB	副田義也	1970k	宇宙感覚と生命感覚（続）：手塚治虫「火の鳥」（連載・少年マンガの美学X）	経済往来：10			JSSDB
JSSDB	副田義也	1970l	不安への望郷：滝田ゆう「寺島町奇譚」（連載・少年マンガの美学XI）	経済往来：11			JSSDB
Cinii	村上繁、今村義正、大堀孝雄	1971	スポーツまんがのこどもに与える影響について：3.社会学的研究	日本体育学会大会号：22		社団法人日本体育学会	Title
JSSDB	副田義也	1971a	少年マンガのなかの少女たち	月刊 BIG：1（3）			JSSDB
SIA	鶴見俊輔	1971a	鳥羽僧正と「鳥獣戯画」	芸術家と芸能人（再録：1991）鶴見俊輔集 8 漫画の読者として		淡交社	Author
SIA	鶴見俊輔	1971b	マンガはハングリー・アートか	太陽：3（再録：1991）鶴見俊輔集 8 漫画の読者として			Author
JSSDB	副田義也	1971b	芸人物語：水野英子「ブロードウェイの星」（連載・少年マンガの美学XII）	経済往来：1			JSSDB
JSSDB	副田義也	1971c	園山俊二論（連載・現代マンガ作家論 1）	経済往来：6			JSSDB
JSSDB	副田義也	1971d	東海林さだお論（上）（連載・現代マンガ作家論 2）	経済往来：7			JSSDB
JSSDB	副田義也	1971e	東海林さだお論（中）（連載・現代マンガ作家論 3）	経済往来：8			JSSDB

JSSDB	副田義也	1971f	東海林さだお論（下）（連載・現代マンガ作家論 4）	経済往来：10			JSSDB
JSSDB	副田義也	1971g	福地泡介論（上）（連載・現代マンガ作家論 5）	経済往来：11			JSSDB
JSSDB	副田義也	1971h	福地泡介論（下）（連載・現代マンガ作家論 6）	経済往来：11			JSSDB
JSSDB	副田義也	1972a	少年マンガ：7つの大罪は本当か	児童心理：12			JSSDB
JSSDB	副田義也	1972b	追跡譚：篠原とおる「さそり」、さいとう・たかを「ゴルゴ 13」（連載・現代マンガ作家論 7）	経済往来：2			JSSDB
JSSDB	副田義也	1972c	松本零士論（連載・現代マンガ作家論 8）	経済往来：4			JSSDB
JSSDB	副田義也	1972d	長谷川町子論（上）（連載・現代マンガ作家論 9）	経済往来：7			JSSDB
JSSDB	副田義也	1972e	長谷川町子論（下）（連載・現代マンガ作家論・最終回）	経済往来：12			JSSDB
SIA	鶴見俊輔	1973	漫画の戦後思想	（再録：1991）鶴見俊輔集 8 漫画の読者として		筑摩書房（原著は文芸春秋）	Author
JSSDB	副田義也	1973a	子どもにとってのマンガ：少年マンガにおける想像力の問題	児童心理：27（9）			JSSDB
JSSDB	副田義也	1973b	マンガ文化	講座現代ジャーナリズム V 広告大衆文化	城戸又一、他	時事通信社	JSSDB
JSSDB	副田義也	1974c	政治マンガの第3の領域：はらたいら「ゲバゲバ時評」	週刊読書人：1025			JSSDB
JSSDB	副田義也	1975d	現代マンガ論			日本経済新聞社	JSSDB
JSSDB	副田義也	1975e	好色・ナンセンス・反権力：黒鉄ヒロシ小論	現代マンガ論		日本経済新聞社	JSSDB
JSSDB	副田義也	1975f	少年マンガにあらわれた父親像（特集）父親	現代のエスプリ 96		至文堂	JSSDB
JSSDB	副田義也	1976	マンガ文化：現代人の心情と論理			至文堂	JSSDB
SIA	鶴見俊輔	1976	魂の躍動を探す楽しみ	朝日新聞夕刊：1.23（再録：1991）鶴見俊輔集 8 漫画の読者として			Author
SIA	磯貝芳郎・福富護	1977	子どものマンガ読みの傾向	東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学：28		東京学芸大学	Author
JSSDB	川浦康至	1977	マス・メディアとしてのマンガの表現構造	年報社会心理学：18		日本社会心理学会	JSSDB
JSSDB	副田義也	1977	特別企画・劇画、この蒼白の飢餓「巨人の星」と「あぶさん」の間：漫画・劇画の現状と未来	潮：217			JSSDB
SIA	鶴見俊輔	1978	風刺はひかれものの小唄か	東京新聞夕刊：1.9-10（再録：1991）鶴見俊輔集 8 漫画の読者として			Author
JSSDB	副田義也	1978a	少女マンガにみる現代女子青年の恋愛	青年心理：6		金子書房	JSSDB

JSSDB	副田義也、西川ユリア、他	1978b	萩尾望都（現代まんがシアター (2)）			清山社	JSSDB
SIA	鶴見俊輔	1979	漫画の面白い社会	朝日ジャーナル：3.30（再録：1991）鶴見俊輔集 8 漫画の読者として			Author
JSSDB	副田義也	1979a	少女マンガにみる現代の性	婦人公論：3			JSSDB
JSSDB	副田義也	1979b	「ポーの一族」における時間の問題	萩尾望都（現代まんがシアター (2)）		清山社	JSSDB
JSSDB	副田義也	1980	ギャグ・マンガとナンセンス・マンガ：青年たちの笑いをめぐって	青年心理：19		金子書房	JSSDB
SIA	鶴見俊輔	1980	漫画の読者として	平凡社カルチャー today：10 「遊ぶ 甦るホモ・ルーデンス」（再録：1991）鶴見俊輔集 8 漫画の読者として		平凡社	Author
SIA	磯貝芳郎	1980	マンガの社会心理学	青年心理：19		金子書房	Author
SIA	中野収	1980	媒体としての漫画	青年心理：19		金子書房	Author
SIA	鶴見俊輔	1981	漫画という言葉	京都新聞夕刊：1.09（再録：1991）鶴見俊輔集 8 漫画の読者として			Author
JSSDB	副田義也	1981a	現代マンガ・描写の成立過程：原作者小論	国文学：4月増刊号		学燈社	JSSDB
JSSDB	副田義也	1981b	子どもとマンガ：「ドラえもん」人気をめぐって	保育研究（増刊号）		相川書房	JSSDB
JSSDB	副田義也	1982a	青年文化としてのマンガ文化	季刊児童養護：13（4）			JSSDB
JSSDB	副田義也	1982b	少年マンガと子ども：昭和30年から現代まで	総合教育技術：3月号付録		小学館	JSSDB
JSSDB	副田義也	1983a	マンガ文化			紀伊国屋書店	JSSDB
JSSDB	山本哲士	1983	漫画 Donald Duck の文化帝国主義：ラテン・アメリカのコミュニケーション装置研究のため	世界社会学をめざして	栗原彬、他	新評論	JSSDB
JSSDB	副田義也	1983b	少年マンガ・少女マンガ	児童文学マニュアル 1983	今江祥智、他	偕成社	JSSDB
JSSDB	副田義也	1983c	中・高校生の生活実態とマンガの読み方に関する調査報告			日本児童教育振興財団	JSSDB
JSSDB	中山一	1984	〈1982年度修士論文要旨〉少女マンガの記号学的分析	社会研究：13/14		法政大学大学院社会科学研究所社会学専攻社会学専攻委員会	JSSDB
JSSDB	副田義也	1984	少年マンガに時代の気分が結晶する	児童文学マニュアル 1984	今江祥智、他	偕成社	JSSDB
JSSDB	副田義也	1985	マンガはなぜ人びとの心をとらえたか	大衆の文化：日常生活の心情をさぐる	中野収、仲村祥一（編）	有斐閣	JSSDB
SIA	中野収	1985	華やかなるマンガ作家たち	若者文化の記号論——感性時代のヒーローウォッチング		PHP出版	Author
JSSDB	杉本厚夫	1987	スポーツマンガの記号論（Ⅱ）子どものスポーツは今	体育・スポーツ社会学研究：6	体育・スポーツ社会学研究会	道和書院	JSSDB

JSSDB	安川一	1987	パーソナルなメディア空間：音楽 マンガ 若者文化	現代メディア論	香内、山本、岩倉、田宮、後藤、川井、安川（編）	新曜社	JSSDB
JSSDB	池田道明	1987	新人類と漫画文化	社会学雑誌		神戸大学社会学研究会	JSSDB
JSSDB	茨木正治	1988	政治漫画の機能：研究動向を主として	年報社会学論集：1		関東社会学会	JSSDB
JSSDB	石田佐恵子	1988	少女マンガにおける「文体」の意味	母子研究：9		社会福祉研究所	JSSDB
JSSDB	副田義也	1989	「物語性」を定着させた巨大な開拓者のマンガ観	朝日ジャーナル			JSSDB
SIA	鶴見俊輔	1989	草マンガは未来を指さす一手塚治虫「有尾人」（らんだむ・りいだあ-17-）	潮：362		潮出版社	Author
SIA	茨木正治	1989	選挙と「政治漫画」——岩手参院補選と福島知事選	政治学論集：2		学習院大学大学院政治学研究科	Author
JSSDB	岩見和彦	1990	いまどきのマンガ文化論	青少年問題研究：39			JSSDB
JSSDB / Cini	片桐新自	1990	マンガの社会学：マンガを通してみる大衆意識の分析	桃山学院大学社会学論集：24			JSSDB
SIA	茨木正治	1990a	選挙と「政治漫画」——研究動向・内容分析	日本選挙学会年報 選挙研究：5		日本選挙学会	Author
JSSDB	茨木正治	1990b	政治漫画にみる選挙：第39回衆議院選挙	年報社会学論集：3		関東社会学会	JSSDB
JSSDB	森重雄	1990	レディス・コミックのストーリー分析	青年心理：82		金子書房	JSSDB
JSSDB	副田義也	1990	現代日本のマンガ文化	社会学ジャーナル：15		筑波大学社会学研究室	JSSDB
SIA	渡辺潤	1990	メディアとしてのマンガ	青年心理：82		金子書房	Author
JSSDB	宮台真司	1991	「感性の時代」の裏側：少女マンガに見る「リアリティ」の変容	アクロス：17			JSSDB
SIA	鶴見俊輔	1991	昭和マンガのヒーローたち	(再録：1991) 鶴見俊輔集8 漫画の読者として 初出：共同通信配信（京都新聞ほか）「マンガの主人公」1979年09-11月、「続・マンガの主人公」1980年04-06月に執筆連載分			Author
Cini	松田恵示、谷口陽子、島崎仁	1992	スポーツ漫画に見られる「表象」としてのスポーツとその構成に関する社会的研究：メディアとしての漫画が持つ特性とスポーツに付与される意味との関係から	日本体育学会大会号：43		社団法人日本体育学会	Title
JSSDB	石田佐恵子	1992	〈少女マンガ〉の文体とその方言性	コミック・メディア		NTT出版	JSSDB
SIA	住田正樹、藤井美保	1992	少年少女漫画の受容過程分析—受け手の特性と反応—	九州大学教育学部紀要（教育学部門）			Author
JSSDB	安川一	1993	マンガの情景：ヴィジュアルの循環	メディアの現在系	香内三郎、他	新曜社	JSSDB
JSSDB	永井良和	1993	情報化と青少年対策：〈有害コミック〉問題からのひらがり	情報通信学会誌：11(3)		情報通信学会	JSSDB

JSSDB	宮台真司、石原英樹、大塚明子	1993	サブカルチャー神話解体—少女・音楽・マンガ・性の30年とコミュニケーションの現在			バルコ出版	JSSDB
SIA	石川弘義	1993	青少年とマンガ・コミックスに関する調査	コミュニケーション紀要：7		成城大学	Author
JSSDB	茨木正治	1993	新聞漫画にみる政治と社会：1992年6・7月を中心として	年報社会学論集：6		関東社会学会	JSSDB
Cinii	豊田秀樹、福富護、西田智男	1993	マスメディアにおける女性表現の単次元性：雑誌メディアにおけるマンガとグラビアの分析	社会心理学研究 8 (1)		日本社会心理学会	Mag
JSSDB	中河伸俊	1993	「脅かされる」子供たち：「有害」コミック問題の構築	子どもというレトリック：無垢の誘惑		青弓社	JSSDB
Cinii	山田政美	1994	漫画の中のアメリカ英語の社会言語学	英語教育と英語研究：19		島根大学	Title
JSSDB	松田恵示、島崎仁	1994	漫画「タッチ」に現れた「遊」概念の二重性	スポーツ社会学研究：2		日本スポーツ社会学会	Mag
SIA	安川一	1994	マンガの語られ—“ヴィジュアル”をめぐる困惑—	メディア社会の現在		学文社	Author
JSSDB / Cinii	矢島正見、山本功	1994	「有害コミック」規制運動の展開	犯罪社会学研究：19		立花書房	JSSDB
JSSDB	副田義也	1994	マンガ総合図書館の提言	図書館雑誌：88 (6)			JSSDB
SIA	茨木正治	1995	政治漫画にみる羽田政権	北陸法学：3 (1)		北陸大学法学会	
SIA	茨木正治	1995	政治・メディア・政治漫画 (1)	北陸法学：3 (2)		北陸大学法学会	
JSSDB	永井良和	1995	〈書評〉宮台真司・石原英樹・大塚明子著『サブカルチャー神話解体 少女・音楽・マンガ・性の30年とコミュニケーションの現在』	社会学評論：45 (4)		日本社会学会	JSSDB
JSSDB	中河伸俊	1995	「有害マンガ」と社会問題のレトリック	現代の社会病理：9		日本社会病理学会	JSSDB
SIA	瓜生吉則	1996	〈劇画〉ジャンルの成立と変容—メディア論的視座による〈少年もの〉ジャンルの事例研究	東京大学社会情報研究所紀要：52			Author
JSSDB	大塚英志	1996	少女まんがの消費社会史：「24年組」の発生と終焉	デザイン・モード・ファッション (岩波講座現代社会学 21)	井上俊、上野千鶴子、大澤真幸、見田宗介、吉見俊哉	岩波書店	JSSDB
JSSDB	馬居政幸	1996	〈書評〉竹内オサム緒「戦後マンガ50年史」	子ども社会研究：2		日本子ども社会学会紀要委員会	JSSDB
SIA	茨木正治	1996	政治漫画に見る村山政権	北陸法学：3 (4)		北陸大学法学会	Author
SIA	茨木正治	1997	政治・メディア・政治漫画 (2)	北陸法学：4 (3)		北陸大学法学会	Author
SIA	茨木正治	1997	政治・メディア・政治漫画 (3)	北陸法学：4 (4)		北陸大学法学会	Author
SIA	茨木正治	1997	政治・メディア・政治漫画 (4)	北陸法学：5 (1)		北陸大学法学会	Author

JSSDB	谷本奈穂	1997	マンガ世界を通してみるユースカルチャー	大阪大学教育学年報：2		大阪大学人間科学教育学研究室	JSSDB
SIA	茨木正治	1997	「政治漫画」の政治分析			芦書房	Author
SIA	瓜生吉則	1997	メディアとしての〈梶原一騎〉—あるいは、「劇画の帝王」の語り方—	ポップ・カルチャー・クリティーク①		青弓社	Author
JSSDB	谷本奈穂	1997	人気マンガの魅力の構造	マス・コミュニケーション研究：51		日本マス・コミュニケーション学会	JSSDB
SIA	中野収	1997	学より論のほうがおもしろい—コミック学への招待	コミック学のみかた。	大森千秋編	朝日新聞社	Author
JSSDB	Berndt Jaqueline	1997	Towards a Methodological Framework for the Study of Japanese Popular Culture	立命館産業社会論集：33 (3)		立命館大学産業社会学会	JSSDB
JSSDB	ベルントジャックリース	1997	「アート」としてのマンガ	立命館産業社会論集：32 (4)		立命館大学産業社会学会	JSSDB
JSSDB	竹内オサム	1997	〈研究情報〉子どもマンガの批評と研究 最近の動向	子ども社会研究：3		日本子ども社会学会紀要委員会	JSSDB
JSSDB	茨木正治	1998	政治・メディア・政治漫画(5)	北陸法学：5 (4)		北陸大学法学会	JSSDB
JSSDB	茨木正治	1998	政治・メディア・政治漫画(6)	北陸法学：6 (3)		北陸大学法学会	JSSDB
JSSDB	守如子	1998	〈研究ノート〉女性向けポルノグラフィ：〈レディースコミック〉から浮かび上がるセクシュアリティ	Sociology Today：9		お茶の水社会学研究会	Mag
JSSDB	石上文正	1998	社会・文化環境における変化・変換について	人間と環境：人間環境学研究所研究報告：2		人間環境学研究所	JSSDB
JSSDB	谷本奈穂	1998	読者アンケートに見るマンガの性差	木野評論：臨時増刊		京都精華大学	JSSDB
SIA	瓜生吉則	1998	マンガ論の系譜学	東京大学社会情報研究所紀要			Author
JSSDB	中西茂行	1998	マンガ版ビルドゥングスロマンの形成とその変容	金沢学院大学文学部紀要：3		金沢学院大学	JSSDB
Cinii	瓜生吉則	1998	〈マンガ論〉の系譜学	東京大学社会情報研究所紀要：56		東京大学	Mag
SIA	北田暁大	1999	マンガ読書空間の戦後史	子供・青少年とコミュニケーション シリーズ・情報環境と社会心理 3	橋元良明、船津衛	北樹出版	Author
Cinii	宇田川拓雄、大島英治、荒谷真一	1999	教科書、新聞、マンガにおける老人のビジュアルイメージ分析	北海道教育大学紀要・人文科学・社会科学編：49 (2)		北海道教育大学	Author
JSSDB	小島茂(草薙ネット)(編)	1999	漫画とアニメで語る男女の性と生			黒船出版	JSSDB

